

H.J.ラスキの政治思想

—1940年代の「同意による革命」と「計画的民主主義」の概念を中心に—

The Political Ideas of Harold J.Laski

—Study of His Concepts about “the Revolution by
Consent” and “the Planned Democracy” in 1940’s—

楯 沢 栄 一
Eiichi Gumisawa

On this essay, I research Laski's concepts of “the revolution by consent” and “the planned democracy” in 1940's, that is fourth stage of his political thought. These concepts are contrived in his considering of Russian-Marxism and Fascism. And I want to make reference to his ideas of liberty and equality in connection with those concepts. In conclusion, I would trace what Laski investigated continuously and wanted to realize in British politics during the war and after the war.

1. はじめに
2. ソビエト・マルクス主義とファシズムへの視座
3. 「同意による革命」と「計画的民主主義」の概念
4. 自由・平等観
5. むすびにかえて

1. はじめに

1) 問題提起

われわれは、ラスキの政治思想を四段階に分け考察することから始った。⁽¹⁾ 本稿はその最終段階にあたる1940年代のラスキの政治思想を論ずるところにある。彼の政治思想の中心にある国家論は、前段階の1930年代にあってマルクス主義の国家論に最も接近し、またソビエト・マルクス主義の国家観に最も好意的な態度を示した時期であった。ラスキはこ

の国家論をもって、1930年代という時代に思想的に挑戦したのである。しかし時代は確実に変化しつつあった。1939年の第二次大戦の勃発は、前代未聞の惨劇の場を残し1945年に終結する。ナチズム、ファシズム、プロレタリア独裁の政治思想の渦巻く中、ラスキの政治思想は、戦中戦後を通してどのような変化をとげたのであろうか。まず第一にソビエト・マルクス主義とファシズムに視点をあて、その考察を試みたい。この考察を通して、ラスキがとった方向について次に考えてみよう。彼は現実の政治についても深い関心を示し、イギリス労働党に属する政治家でもあった。このような状況の中で生まれたのが「同意による革命」(the revolution by consent)と「計画的民主主義」(the planned democracy)と言われるもので、ラスキの晩年の政治思想を象徴する概念である。これらが第二に考察することである。第三にラスキの政治思想に底通するもの、つまり連続性を持って維持されているものについて言及してみたい。これはまた、ラスキの政治思想の研究を始めるにあたって重要な視点でもあった。ここで提起されるのは、彼の自由・平等観である。ロック(John Locke 1638～1704)やミル(John Stuart Mill 1806～1873)に始まるイギリス自由主義の影響を受け、さらに独自の自由主義を発展させたラスキの自由論こそは、プラグマティックな変化をみせる彼の政治思想の中で一貫性を保ち、彼の変ることのない信念体系でもあったのである。⁽²⁾ 端的に言えば、ラスキの政治思想の核心は、まさにこの自由論であると言ってもよいかもしれない。絶対権力の絶対反対者たるラスキは、自由の探求者であり、自由の信奉者であったのである。平等との関連でこの自由観を考察してみたい。そして最後の締め括りとして、戦後のラスキの思想に言及してみたい。戦後はわずか5年間という短い年月の中でしか活躍できなかったラスキではあるが、そこで彼は何を求め、何と戦ったのか考えてみたいと思う。

さて以上のような考察を始める前に、1930年代の終りから40年代にかけてのイギリスの政治状況とラスキの関りを見ておこう。

2) 第二次世界大戦とイギリス

1938年春、ナチス・ドイツはオーストリアを併合し、秋にはチェコスロバキア領内のドイツ人地区を併合しようとして企てた。ミュンヘン会談はこのような状況の中で、1938年9月イギリスの首相チェンバレン(Neville Chamberlain 1860～1940)の呼びかけにより、ドイツ、フランス、イタリアの首相を集めて行われた。この目的は、チェンバレンによるドイツの領土要求を認めるというナチスに対する宥和政策の実現であった。しかし、ドイツはそれに満足せず、1939年春にはチェコスロバキアの解体を目論み、ポーランド回廊獲

得に向けての同国に対する圧力行動に出て来た。このような事態に、イギリス、フランスは、ドイツの横暴に業を煮やし、宥和政策に見切りをつけると同時に軍備を充実し、ソ連との同盟交渉に入ったのである。しかしこの交渉が長びく間に、ヒトラー（Adolf Hitler 1889～1945）はスターリン（Joseph Stalin 1879～1953）と手を結び、1939年8月独ソ不可侵条約締結という目を疑う行動に出た。そしてドイツのポーランド侵行と同時に、9月3日、イギリス、フランスはドイツに宣戦し、第二次世界大戦が勃発したのである。翌年には、ドイツはデンマーク、ノルウェー、オランダ、ベルギーに侵入し、6月ついにパリを占領した。イギリスでは、この年の5月チェンバレンが退いてチャーチル（Winston Churchill 1874～1965）が首相の座につき、ドイツとの戦いに強力な指揮をとることになる。1941年6月、わずか2年たらずで不可侵条約を反故にし、ドイツはソ連に突然宣戦し独ソ戦争も始った。この年には、日本を含むアジア諸国を巻きこんだ太平洋戦争も勃発した。ここに人類史上最悪の惨劇の舞台の幕が切って落されたのである。この舞台は、連合国による1943年イタリアの無条件降伏に始まり、1945年5月のドイツの無条件降伏、8月の日本の無条件降伏をもって幕を閉るのである。⁽³⁾

さて、この時期のラスキの活躍はいかなるものであったのだろうか。彼の政治活動の場とその政治的態度について見ておきたい。まず彼の主たる政治活動の場所は、労働党の「社会主義者連盟」（Socialist League）⁽⁴⁾であった。これは、党内でも知識人の集まりとして知られ、ラスキは1932年の創立以来の有力なメンバーでもあった。党内では左派に属し比較的急進的な人々の集まりであったことから、党執行部との対立もしばしば見られた。またラスキの政治活動の場は、1936年設立の「レフト・ブック・クラブ」（Left Book Club）⁽⁵⁾にもあった。出版社主のゴランツ（Victor Gollancz 1893～1967）とストレーチ（John Strachey 1901～1963）を含む、三人が中心になり、毎月図書を選定し、会員に廉価で頒布するというクラブである。この二つのサークルに共通するのは、反ファシズム統一戦線運動を支援することであり、その実現を果すことであった。しかし、これらを標榜することは、共産党との提携を拒む労働党執行部との対立を深めることになり、1937年の党大会は、「社会主義者連盟」の解散を決議した。ラスキは、党内に滞ることを決意し、やむなくそれに従ったのである。また、「レフト・ブック・クラブ」も労働党執行部との対立が明確化した。その理由は、前者が統一戦線を主張するものであり、ストレーチが共産党との関係が深く、選定図書も共産党関係のものが多くということであった。しかし、この労働党大会でラスキは、選挙区労働党から選出される党執行委員に選出され、積極的に党の

政策決定過程にかかわって行くことになる。⁽⁶⁾ 戦争とファシズムに対する脅威がまさに、彼をそうさせたのであろうが、彼の生活は、あまりにも多忙であった。「レフト・ブック・クラブ」の責任者、ロンドン大学教授、『トリビューン』(Tribun)誌の編集委員、さらに地域活動としてのロンドン市フルハム地区の参事と、政治家、学者、教育者、ジャーナリストという一人何役もこなしていた。

ラスキは1938年のチェンバレン首相の宥和政策に明確に反対の態度をとり、彼を批判した。この政策が、民主主義国家の戦争に対する憎しみからとられたことは、ラスキも理解する。しかし、敵の権力の認識が足らず、大衆のための戦いを遂行しているという信念が足らいのではと、彼は主張する。そして、もし戦争を回避しようとするなら、集団安全保障をもってする他はなく、ソ連との同盟を急ぐべきだと主張したのである。しかし、チェンバレンは自国の既得権にのみ執着し、それに失敗したあげく、ファシズムとの和解という手段に出たのだと手厳しくラスキは批判する。また、ラスキ自身も大変ショックであった独ソ不可侵条約に対してどのような意見を持っていたのであろうか。少なくともまだ期待を寄せていたソ連である。彼は一方で、イギリスが侵略に対し抵抗する意志の無いことが解って結んだ条約だから一定の理解を示すが、他方でスターリンのこの行為は、ナチスに対する時間かせぎと、戦争回避以外の何物でもなく、チェンバレンの宥和政策の二の舞だと批判する。1940年チャーチルが首相となり、45年7月まで戦時挙国連立内閣の舵取をすることになる。労働党の入閣もラスキは全面的に賛同し、チャーチルをして一般大衆の信頼を得た指導者であり、反ナチの決意のシンボルだとも言っている。しかし反面、チャーチルが貴族出身であり、労働者に味方する可能性が少なく、戦争の勝利の目的も特権階級のためにあるのではないかと懸念を表明している。⁽⁷⁾ しかし後述するように、戦時中のチャーチルに対して、ラスキは的はずれにも社会主義の実現を期待する。この時期の彼の政治戦略の中心を占める「同意による革命」の実行役は、チャーチル以外には考えられないとしたのである。

1940年代という戦中戦後にまたがる歴史の中で、ラスキの政治思想の核心に迫る著書は、現実の分析から将来の途を描き40年代前半に出版された『現代革命の考察』(Reflection on the Revolution of our Time)⁽⁸⁾と『信仰・理性・文明』(Faith, Reason and Civilization)⁽⁹⁾である。これらを中心に、ラスキの政治思想を考察してみることにしよう。

2. ソビエト・マルクス主義とファシズムへの視座

1) ソビエト・マルクス主義

ラスキは、ロシア革命を三つの時期に分けている。第一期は1917～24年で、レーニン（Vladimir Ilich Lenin 1870～1924）の死を以て終る時期である。ここでは、レーニンの指導の下で革命が地盤強化された。第二期が1924～27年にあたる。スターリン派とトロツキー（Leu Davidovich Trotskii 1879～1940）派による内部権力闘争のために、ボルシェビキ活動が停滞した時期である。そして第三期は1927年以降のスターリンに多くの権力が集中されてきた時期である。⁽¹⁰⁾

当然にも、ロシア革命の意義について、ラスキの賛辞は著作のいたるところに見られる。『現代革命の考察』の中では次のように言っている。少し長いが引用しておこう。「ロシア革命は宗教改革と同様に、文明における全般的危機と時を同じくして生じたものだからである。しかもこの革命が、その進行につれて、生産手段の私有は経済生活の能率的組織化に不必要であることを示し得るならば、更に、この革命が利潤獲得という動機に代るべき適当な何物かの存在を顕示し、その結果、失業が不必要なることを立証し得るならば、またもし、この革命によって国民大衆が文化的遺産に浴し得るに至ること、ならびに科学が工業技術に及ぼす衝撃は労働者の経済的安定に絶えざる脅威を与えるものではないことが証明されるならば、その暁には、ロシア革命は明らかに人間史上未曾有の活気に満ち溢れた新しい創造的時代を打ち開いたことになるであろう」⁽¹¹⁾と。また、『信仰・理性・文明』の中では、「今日もはやロシア革命の意義は疑えない。というのはいろいろ重大な欠陥（そして事実、それらは重大である）にもかかわらず、革命は、ソ連人民大衆の中に、彼等をして、純粹に個人的な目的以上の、ある偉大なる目的に向かって、献身せしめるような意志を、見事創造し、しかもその献身的労働の中において、彼等は、さまざまな困難に直面しながらも、よく物質的進歩と精神的高揚とを見出すことができたからである。……今やそこには、社会公共的労働に対する誇りがあり、また各個人が、その自己実現の満足を確保しうる方法の中に、同時にその社会的目的をも見出しているのだ。こうしたことから、徐々として、またおそらくは苦痛に堪えながらも偉大なる文明の特質が、現にわれわれの眼の前に生まれつつあるのである」⁽¹²⁾と述べる。まさにラスキのロシア革命に対する賛辞の手はゆるまない。そして、何よりもこの革命の担い手としてのボルシェビキ党の役割を重要視し、その評価を次のようにしている。「彼らは混乱に対しては秩序を、

恐怖に対して希望を提供した。社会の不安定と崩壊とによって怯えきっていた人々に、彼らは日常生活の仕来たりを回復してやった。彼らは世論を味方にひきつけた。その理由の一つは、彼らが人民の要求を実に手際よく診断したからであり、もう一つの理由は、彼らが極めて力強くこの権力を行使したからである⁽¹³⁾と。そしてこのボルシェビキを導いたのがレーニンで、彼に対する評価を次のように述べている。「ボルシェビキが打ち立てた建築の基礎工事は、レーニンの如き、雄大な構想と、豊かな智謀と、凡ゆる者を威服せしめるに足る勇猛果敢な意志力を兼ね具えた人物にして始めて想到しうる態のものであった。またレーニンの生前に達成されたことは、従来如何なる革命的政治家が実現し得た夢に比しても少しも遜色のないものであった。とにかく、レーニンの業績が彼に近代史上最高の人物の一人とみなされるべき資格を与えられることは一点の疑いもない⁽¹⁴⁾と。レーニンへの賞賛は後に述べるスターリンとの比較で注目すべきである。

「プロレタリア独裁」(proletarian dictatorship)に関しては、ラスキのこの当時の見解を慎重に考察しなければならない。彼が「それ(批判的判断義務を抛棄)は、また左右両派を問わずおよそ一切の独裁制が必然的に冒さざるを得ぬ巨大な危険の源泉でもある。なんとなれば、独裁制下の国民、特にその帰依者が批判的判断の義務を抛棄することは、この体制が、その支配下にある大衆から急速に遊離して行くことを必然的に意味するからである⁽¹⁵⁾と述べるごとく、一般的に独裁は決して肯定されるものではないのである。しかし、彼はソ連の特殊な条件の中で次のように言う。「プロレタリア独裁が、彼らのしている努力の、決して永遠相でないことは、何人もわかるだろう。というのは、まず何よりも、彼らが受け継いだ当時の完全な無政府状態は、もしその当局の混乱から、なんらかの秩序をつくり出そうとすれば、当然強力な政府を必要とした。第2に彼らが、ケレンスキー政府の下にあって、生産関係の変革を図った時、その努力は、まず法的関係の変化を怖れる有産階級によって反対を受けたばかりか、彼らを動かそうとする、あらゆる外国勢力からの反撃にぶつかった⁽¹⁶⁾と。つまり、ソ連という特殊な政治状況の下で、どうしても取らざるを得なかった政治的手段であると言う。そしてこの独裁は、人間の自発性を抹殺するものではなく、その目標たるは階級・信条・民族の如何にかかわらず、全ての市民の福祉増進をするものだとも言っている。⁽¹⁷⁾これはまさしく、ソ連での「プロレタリア独裁」の擁護とみてとれる。しかし、あくまでもソ連の政治社会状況下のもので、例えば、これをイギリスやアメリカの民主主義国に適用するというようなことは、ラスキとって考えも及ばなかったことなのである。⁽¹⁸⁾

さて次に、スターリン体制確立後のラスキのロシア観について見てみよう。レーニンの時代とは違い、スターリンに対しては、ラスキは相当厳しい見方をしていることは注目したい。

1939年の独ソ不可侵条約の締結が、ラスキにとって大変ショックであったことは疑いえない。彼は言う。「かつてはファシストの侵略は如何なる犠牲を払っても撃退されるべきだと激しく要求した共産党は、スターリンの必要に相応して、ファシストの侵略を宥和するためには如何なる代価を払っても惜しくない」と主張する党に変わったのである⁽¹⁹⁾と。このような党の変節は、当然にもラスキをして落胆させた。かつてのファシズムと戦う党、労働者を解放するための党は大きく変わったのである。ソ連に対する失望は確実に大きかった。しかし、ソ連に対して、同情的な発言や止むを得なかったとの発言も見られる。「大戦争の圏外に身を置くというこの一事は、スターリンの国内政策の秩序整然たる進展のために重大な意義を持つものだったのである。第二に、スターリンは、この条約によって彼が中立を保つための代償を強要することができた。ところが、かかる代償は英仏両国民には支払い得ぬものだったのである⁽²⁰⁾」と。ラスキの心境は複雑である。しかし、彼の次の言葉には、当時のまさしく正直なソ連に対する気持を見ないわけにはいかない。彼が「スターリンは、1939年、いわばミュンヘン会談の二の舞を演じたともいうべき屈辱的協定(独ソ不可侵条約)を結ばねばならなかった。もっとも、この際彼はこの協定の受諾に対する代償を強要することができたに相違ない。ところで、スターリンがかかる協定を結ばざるを得なかった理由は、彼が世界を挙げての反ファシズムの抗争のうちに指導権を保持することによって惹起される経済的危険をも、心理的危険をも敢て冒し得なかったところにある⁽²¹⁾」と言う時、ラスキは、スターリンの手の内を読みとったのであり、彼が反ファシズム戦線の先頭には立たないということを実感するのである。われわれは、ソビエト・マルクス主義に対する熱狂がラスキの心の中に鎮まって行くその出発を見るような気がするのである。⁽²²⁾そして、それは当然にも、スターリニズムに対する距離を広げて行くということにもなるのである。

ラスキは、そもそも、レーニンとスターリンの指導の違いを完全に見分けていた。つまり、前者にあっては、党内の反対派を容認し活発な議論を行い、反対や批判の廉で処刑したり追放したりすることはなかった。しかし、後者が指導権を取ってからは、様相が一変し、彼に異を唱える者は反革命分子とみなされるようになった。その結果が大量粛清であり追放であり処刑であったのである。このようなスターリニズムにあらわれた正統主義に

ラスキは嫌悪感を表明する。「スターリンと彼の同志たちについても、他のあらゆる独裁者について言うと同様に、彼らは絶対権力の行使によって心の底まで腐敗墮落せしめられていると言っても間違いはない」⁽²³⁾とまで言っている。初期の消極的自由主義者としてのラスキの顔さえのぞかせいるようにも思える。そして、スターリンの武断外交についても、彼は鋭い批判を浴びせている。「フィンランド攻撃とヒトラーのロシア攻略との間におけるスターリンの政策は、民主主義諸国における労働階級のソ連観を分裂混乱せしめるのに大いに貢献することになった。レーニンの主張した平和的領土割譲要求とスターリンの強行した隷属の要求との間の著しい対照は余りに歴然たるもので、誰れの眼にも弁護の余地の存するものとは見えなかった」⁽²⁴⁾と。このようにスターリニズムにはラスキの容認すべきものがほとんどなくなったように思える。むしろ危険性すら感じるようになった。しかしここに至っても、ラスキがロシア革命の目的と独裁などによる為政者が犯す問題とを区別しなければならないと主張していることは興味深いところである。「ソ連における少数者が数々の重大な過誤を冒したことは事実だとしても、彼らが個人的権力を唯それ自体のためにのみ維持するものであることを示すべき現実の証拠となるものは存在しない。ロシア革命の偉大な目的は依然として存在している。この独裁的支配が醜悪な歪曲を呈した事実は、以上のことを切り離して別箇に検討すべき理由に基づくものである」⁽²⁵⁾と彼は言っている。ロシア革命の目的は保留し、ソ連体制の批判をすることは、ラスキにはしばしば見られる。ラスキは、この過程を驚くべき大実験として把え、その目的に沿うことを願ったのである。しかしその行程はあまりにも険しいものであった。ラスキにあって、ソビエト・マルクス主義の把え方で、擁護と批判が入り混り、一見錯綜しているかのようにみえる問題の解決口は、ここにあるのである。戦後、ラスキのソ連及びスターリニズムへの批判は益々強くなる。それはスターリンの神格化による自由の欠如、希望の導きの恐怖への変化、それらは、ラスキをして、偉大な実験の失敗を予見させるものであったのである。

2) ファシズム

ラスキは1940年代に入っても、30年代にマルキストに最も近づいた視点からファシズムを分析していることがわかる。彼は言う。「一体何がファシズムの本質なのか、ファシズムとは衰退期にある資本主義の産物である。それは資本主義社会に包蔵される諸々の生産関係を超克せんとする民主主義に対して財産と権益との保持者たちの行う復讐なのである。しかし、それは民主主義の否定にとどまるものではない。それは資本主義の衰退を立証す

る指標たる不平不満を取り除くという希望を以て行われる侵寇政策を正当化するために、国家主義的感情を利用することでもある。およそファシズムが成功を収めたところでは何処でも、ファシズムは、労働者の増大した要求に対抗する企業家側の抗議を基礎として確立されたものである。かかる抗議の効果をあげるために、企業家側は誰れか傑出した傭兵隊長ともいべき人物ならびに彼の手下の傭兵たち——国家権力を掌握する代償として労働者の力を抑圧することに同意した人々——と結託し、これといわば盟約を結んだというわけである⁽²⁶⁾と。われわれはここに、ラスキのファシズム観の本質を見るのであるが、若干整理してみよう。①ファシズムは衰退期の資本主義の産物であること。②ファシズムは民主主義を否定するものであること。③ファシズムは国家主義的感情を利用するものであること。④ファシズムは企業家が傭兵隊長と結託していることなどが強調されている。30年代に比べて、ラスキのファシズム分析ははるかに詳細になって来ている。イタリアやドイツのそれぞれの国内情勢の分析から始まり、両国のファシズムの相違、成り立ちの言及が見られる。また、大企業の傭兵隊長たるムッソリーニ (Benito Mussolini 1883~1945) やヒトラーへの分析にも興味深いものがある。そして、マルクス主義者が充分に関心を示さなかった部分として二点ほど、ラスキは指摘している。その一つは、傭兵隊長の諸能力についての言及であり、その中でも重要なのは、彼らが大衆運動というものを知っており、それを組織することができたということである。「彼らはレームの如き失業軍人たるとローゼンベルクの如き零落した知識人たるとを問わず、あるいは、不平不満たる青年、プチブルの商人たるを問わず、およそ社会的権利を剥奪された人々を打って一丸となって、これを強力な組織に結集することができた⁽²⁷⁾」と。もう一つは「ファシズムが、それ自体の内なる論理に促されて従来の自由主義的形態における資本主義の破壊へと駆りたてられていった⁽²⁸⁾」という指摘である。⁽²⁹⁾つまり、ファシストは、失業問題の解決のために国民的伝統などを復活し、公共事業や対外政策に積極的に打って出たということである。このようなムッソリーニやヒトラーのファシズム運動に対して、彼らの抬頭期に断固として対抗する勢力があれば、彼らの運動は打倒できたとラスキは主張する。そして、その責任の一端をソ連を中心とするコミンテルンに求めている。つまり、彼らが内輪揉めに興し、不毛な理論闘争をくり返している間に、ムッソリーニやヒトラーは国民の心情をつかみ、組織化と運動化をすることが出来たと言うのである。

このようなファシズムの分析を通してラスキが一番恐れたのは、自由の弾圧にとまなう民主主義の瓦解であった。彼は言う。「ファシズムは、それが国家権力を掌握する以前に

特権を保持していた人々の手に引き続き特権を限定することを求めるものである。かかる努力を成功せしめるためには、政党、教会、労働組合、その他ファシストの進路を妨げる惧れのある如何なる組織をも弾圧せざるを得ぬ。ファシズムとは、自己の目的のために社会全体を変形せしめんとする試みである。したがって、ファシズムは必然的に、その社会においてかかる変革の実行を妨げる惧れのある人々の思想、組織、手続き等を破壊せざるを得ぬこととなるのである⁽³⁰⁾と。われわれは、まさにここに、ラスキの危機感を切に感じるのである。ファシズムは、完全に民主主義と自由主義と対立するものであった。しかし、あのソ連の偉大な実験は如何なるものであつたらうか。もちろん、彼もボルシェビズムとナチズムの同一視は全くの誤りであると強調するのであるが、初期の目的から益々遠のいて行くかに見えるソ連の実験は、ラスキをして益々暗澹たる想いにかからせたのである。1940年に成立したチャーチルの戦時内閣の一翼を担う労働党の幹部として、この大戦をファシズムに対する民主主義を守る戦いと位置づけ、彼は戦略・戦術をめぐらすのである。それは、とりも直さず、民主国家イギリスの伝統に基づき独裁とは無縁の新しい政治体制、そのプログラムを考えねばならなかった。それが「同意による革命」と「計画的民主主義」だったのである。⁽³¹⁾

3. 「同意による革命」と「計画的民主主義」の概念

1) 「同意による革命」

われわれは、この「同意による革命」を手段としての概念として、「計画的民主主義」を目的としての概念として把えることが出来るかもしれない。つまり、前者を手段に用い後者の目的を実現するという関係である。1940年代になるとラスキは、「同意」(consensus)という言葉を強調するようになる。これは国民の「同意」ということであり、政府の「強制」(compulsion)とは正反対の概念である。民主社会の存立に関して次のように述べている。「民主社会の存立とは、この社会がその政府を通して施行せんとする法律に対する一般の尊敬の念を絶えず維持し得るか否かに懸っている。ところで法律を尊重する精神とは、結局のところ、法律が強制によらず同意によって施行された場合に生まれるものである⁽³²⁾と。「同意」というのはこれほどに政治社会には重要なのである。ソ連に卓した夢と現実のギャップは益々開きつつあった。それは民主社会からはほど遠いものであり、当然に安定した社会ではない。そのような国の矛盾を意識しつつ、ラスキはこの「同意」を強調したのであろう。また戦時という状況を鑑みても、この戦争の勝利ということ考

えても、「同意」ということがなければ決してイギリスの勝利はありえないということ、彼は現実から学ぶのである。「イギリスの民主主義にとって、この戦争の中心問題は、その資源を完全に動員し、その生活習慣を一つの目的に十分に適応せしめることであったが、この目的の達成は、戦前における生き方の根底をなす諸々の前提に大々的変革をもたらすことを意味するものであった。かかる変革は、先ず第一に、同意によって実現されなければならなかった。強制によってこれを行ったならば、勝利の基礎をなすべき国民総意の統一を破壊することになったであろう」⁽³³⁾と。ラスキは、国民の「同意」というものが、理想社会の実現に向けて、いかに重要であるか現実社会から学ぶことになる。この「同意」によって実行される「同意による革命」とは如何なることか、さらに考察してみよう。

それは、ラスキをして端的に言わせしめれば、国民の総意の下で行う自的に関する決断なのである。そして、この目的が「計画的民主主義」、つまり福祉が十分に拡充ししかも維持される社会ということになる。⁽³⁴⁾ところで、この「同意による革命」でラスキが最も重要視しているのが時期の問題である。彼はこの革命概念の中味を時間的内容を含めてふくらませる。つまり、革命の時期を非常に重要視するのである。彼は言う。「もし、われわれが同意による革命を欲するならば、行動を起こすべき絶好の時は今である」⁽³⁵⁾と。まさにこの戦時中こそチャンスがあるのだと言う。そして、その理由について彼は次のように述べている。「第一に深刻な変革を受け入れる心境がわれわれに得られるのは、差し迫った危険の重大性のために、平時における特権階級の抑圧が崩壊せしめられたという意見が広く一般の人々の間に抱かれるに至る時代においてのみであるという結論である。第二は現在われわれに得られるかくの如き機会が逸し去られるならば、労働階級は立憲的手段によって、この国の政府として容認されるに至る場合にのみ、かかる変革に着手すべき権利の擁護に成功し得る立場に立つことになるという結論である」⁽³⁶⁾と。ラスキはこの戦争を自由のための戦いと位置づけ、戦争の勝利は確信はしていたが、戦後に果して民主的自由な社会が来るとは必ずしも思っていなかった。「もし戦争が明日にも終結するものとすれば、生産関係における恒久的変革は一つとして実現されてはおらぬであろう。しかも、われわれを決定的に革新へと駆り立てる衝動をわれわれは喪ってしまうだろう。…経験に照らせば、かかる事態は一時的な戦後景気の出現を意味する。そして、それに続いて落ち着く先は、好況と不況との循環するような陰鬱な時期であり、その結果、民主的諸制度の存続を最早許さぬような政治的危機を招来するに至る」⁽³⁷⁾と言う。たしかに第一次大戦中も統制経済で戦時社会主義的などころがあった。しかし戦争が終ると人々は戦

前へと慣れた習慣にもどり、社会変革への気力をなくしてしまったのである。ラスキはこれを恐れた。そして、この二の舞いを防ぎたかったのである。「同意による革命が戦争の代償」⁽³⁸⁾であるから「戦争の最中に革命を起さなければならぬ」⁽³⁹⁾とラスキは訴えるのである。

さてラスキは、この革命の嚮導を何に求めたのであろうか。次に考察してみよう。宥和政策において不評をかったチェンバレンに代りチャーチルが首相の座につき、イギリスの1940年代の戦時挙国連立内閣はスタートする。この内閣には、労働党からアトリー（Clement Richard Attlee 1883～1967）とグリーンウッド（Arthur Greenwood 1880～1954）の二人が入閣していた。ラスキは、労働党の幹部としてこの内閣、とりわけチャーチルに対する期待は初期において大きかった。彼こそは、反ナチのシンボルで、国民の圧倒的多数の支持のもとに出現した指導者なのである。ラスキは、チャーチルに対して、自分の権力の維持のため憲法や議会制民主主義を無視するような人物ではなく、その点ではヒトラーとは根本的に違っていると強調している。⁽⁴⁰⁾このようなチャーチルへの評価には、大いなる意図があった。それは、ラスキのこの当時の一番の関心事「同意による革命」——終戦を契機とした新しい民主社会の実現——の実行役の代表にチャーチルを目論んでいたからである。国民の多数の支持があり信頼を得ている保守党の党首が、戦時中の権力を利用し、戦後のイギリスの再建計画の策定と実施をすれば、新しい民主社会の実現の道のはより近づき、より確実性が高いと考えたのである。しかし、この期待は残念ながら失敗に終る。ラスキは幾度となくチャーチルへの説得を試みたが、快い返事はついに得られなかった。その理由は、この戦争に勝たねばならぬこと。そしてこのような緊急体制の下での社会主義的理念の実現は、混乱をもたらし、非民主的になりがちだということであった。チャーチルに対する期待が徐々に薄れていく。1942年には「チャーチル政府の立法は、われわれの社会の生産関係における重要点に全く触れられていない。大胆さとか勇気とかいったものの形跡を見出し得るようなイギリス再建計画を、この政府は一つとして発表しておらぬ。教育、国民保健、住宅問題等に関して、人々の見るものは、既得権益の保持者たちが、まさに1918年から1919年にかけて見られた事態の特徴をなした地位争いのために権謀術数を旧態依然としてめぐらしているという事実である。労働者たちは、前大戦におけると同様に、犠牲に供することを要求されている」⁽⁴¹⁾と手厳しい批判に変っている。

そこでラスキとしては、何とかしてチャーチルに「同意による革命」の実行役の受諾を強力に主張することが出来る人物を探す方策に出ざるを得なかった。その一人が、アメリ

カ第32代大統領のルーズベルト（Franklin Delano Roosevelt 1882～1945）である。アメリカの著名な政治家とも親しかったラスキは、その一人であるルーズベルト大統領からの圧力を期待したのである。もう一人は戦時挙国連立内閣に入閣している労働党党首アトリーである。同じ閣僚として説得してもらうことを期待したのである。しかし、前者には直接の手紙や公開書簡によって行われたが、ラスキのアメリカの政策批判も手伝って、むしろ両者に亀裂が入ってしまうという状態で失敗に終わっている。後者の方は、労働党内での統一が必ずしもとれていなく、効果がなかなかあらわれなかった。特に入閣中のアトリーの姿勢は、連立内閣維持を第一義的に考え、首相チャーチルには積極的には出られなかったのである。⁽⁴²⁾ これに対して、ラスキはもどかしさから失望感をつのらせるのである。ラスキの主張をめぐる労働党内部での対立は、アトリーの行動をにぶらせるもので、結局この作戦も効果をあげることはできなかった。このように、チャーチルへの期待と、チャーチルに圧力をかけてくれる人物への期待も失敗に終わったのである。このことは、またラスキをして出発点に帰ったことを認識させるもので、彼は、労働党自身の力で実行しなければならないという結論を導き出すのである。ラスキには幸いにも労働党内に味方もいた。それは選挙区労働党の同志であった。彼らは一般大衆や労働者と日々緊密な関係を保ち、その意見を上部に上げる大きな役割があった。そして、労働党執行部もこの選挙区労働党の活動を決して無視できない状況にあった。ラスキは、最後に残された労働党への期待を次のように述べている。「労働党は、その先駆者たちの信仰と情熱とを回復せねばならぬ。労働党は、またかかる信仰と情熱とを、現在党が最も力強く訴えている労働組合の陣列を越えて、更に遙に広い範囲にわたる人々に伝える力を持たねばならぬ。労働党は、科学者、技術者、及び経営者階級をして、労働党が支持する社会とは彼らが現在の秩序の下においては獲得することを得ぬ機会、権力、及び安定を提供するものであることを認識せしめなければならぬ。つまり労働党は、これまで大体において労働党の要求を認め得なかった人々、特に計画的民主主義の成功のために大いに寄与を求めねばならぬ人々を計画的民主主義の支持者として獲得せねばならぬ」⁽⁴³⁾ と。

戦時中こそは、「同意による革命」の実行の最大のチャンスであった。しかし、これは様々な手段を講じても失敗に終わった。そして次の方策を考えねばならなかった。ラスキはやむなく終戦後に期待することになる。それは、終戦後に行われた総選挙で圧倒的な労働党の勝利を収め、労働党主導の下で「同意による革命」を進めることであった。これについては後述することにしよう。

2) 「計画的民主主義」

われわれは、この「計画的民主主義」の概念を目的概念と捉え、「同意による革命」の結果実現される社会及び体制と考えることができる。ラスキによれば、「同意による革命」こそが、最もイギリスの政治風土に合う革命であったので、これによってもたらされる「計画的民主主義」も戦中戦後を通じてイギリスの政治状況に必要な欠くべからざるものであったのである。具体的にラスキはどのようなことを考えていたのであろうか。まず第一に「資本とクレジットの供給の統制」⁽⁴⁴⁾が必要であるという。このことは、イングランド銀行、株式組織銀行、保険会社、建設会社の国有化を意味するもので、投資を個人の利潤にでなく、公共の必要に直接的かつ持続的に結合せしめるために必要なのだという。第二に「国家は土地を所有し支配せねばならぬ」⁽⁴⁵⁾と言う。これは都市の特に被爆地の適性な計画、農業が国家経済における適性な地位を獲得するために、さらに、産業の適性な立地要件やイギリス風土の美観の維持に必要なのだと言う。第三に「輸出入貿易の国家統制が存在せねばならぬ」⁽⁴⁶⁾と言う。この統制は、消費者のことを考えるいかなる計画生産にも欠くべからざるものである。これがもし実行されなければ、今や避けることのできなくなった国際的統制に自国の経済を適合せしめることが不可能となるからだと言う。そして第四に「輸送、燃料及び電力の国有及び国家統制が行われねばならぬ」⁽⁴⁷⁾と言う。なぜなら、これらは現在の形式では、浪費ばかりを高めるものであり国有の実施により適性な運用と節約が出来るのだと言うのである。これらの主張から想像できるのは、まさにラスキは「計画的民主主義」の実現と社会主義国家の建設とを同一視しているのではないかという見解である。しかし、これに関して、ラスキは実に微妙なところで相違を見せている。彼は言う。「これらの提案は、戦争の終結と同時に社会主義国家が建設されることを想定するものではない。これらの提案は、もしも選挙民が将来において社会主義国家の建設を決定するならば、この建設の一つの基礎たり得べきものに外ならぬ。これらの提案の目的は、社会主義国家の建設とは関係がないわけではないが、これと異ったもの、つまり現在われわれの間に存在し、戦争勃発以前において既に権威を伸張し決意を固めつつあった反革命勢力に対し、われわれの政治的民主主義を護らんとする目的である」⁽⁴⁸⁾と。「計画的民主主義」はストレートに社会主義国家建設を意味するものではなく、反革命勢力に対する民主政治の防衛のために提起したのであると言う。そしてこの「計画的民主主義」の実行は、時の内閣によって実現されるべきだと言うのである。内閣は、ソ連の国家計画委員会に匹敵すべき専門委員会をつくり、そこでの資料をもとに最終計画案をつくり、

議会にかけ協賛を得るのが最も好ましいというのである。「議会的民主制の組織における計画の全般的配置は明らかに閣僚の責任である」⁽⁴⁹⁾と言っている。そして、まさに「同意による革命」による「計画的民主主義」の実現は、この戦争中にこそチャンスがあるのだと言う。ラスキは、そこで指導者の重大な責任を訴える。「われわれは、偶々戦勝の必要が革新の為の機会と時を同じくして現われるという情勢下に置かれている。一部の者の利益が国家の利益に決して打ち勝ち得ぬという時にあたって、かかる革新の気分が存在するという実に稀有の現象が起っているのである。しかし、この気分は戦争の後までも続きはせぬであろう。したがって、この気分のもたらすべき可能性を活用し得ぬ指導者は、かかる気分がまさに達成せんとしている目的そのものを挫折せしめることとなろう」⁽⁵⁰⁾と。

ラスキは自らの「計画的民主主義」の提案に対し多くの反論も予想している。その代表格が資本主義的自由論者のリップマン (Walter Lippman 1889~1947)⁽⁵¹⁾などのグループである。ラスキは、彼らとはアメリカで論争をする機会もあった。彼らは、集産主義をまさに自由に対する脅威とみなしており、計画社会が自由を否定し、人間の人格を破壊する専制国家だと主張している。一方ラスキは、彼らに対し資本主義的民主制に含まれる問題を提起しながら、次のような反論をしている。「かかる資本主義的計画は、生産においても分配においても、消費者を搾取するための機構、つまり、消費者の主権に対し強力に挑戦する私的企業帝国を確立することによって、消費者主権獲得の望みを破壊するのに貢献するような搾取機構をつくり出すものである」⁽⁵²⁾と。また「よき社会が無計画的かつ利潤獲得的なものであり得ると主張にとって致命的なものは、一つの視点から見れば、この社会が資本主義的民主制の諸形式の蔭に隠れて事実上必ず金権主義に陥るという点であり、別の観点から見れば、この社会が、真・善・美の如き無形の価値を物質的な富よりも一層望ましいものたらしめることを求める如何なる目的にも究極的に必ず敵対するものである」という点である」⁽⁵³⁾と反論をするのである。

この「計画的民主主義」の実現は、手法は違おうとしても、先駆者はソ連であった。しかし、独裁という型で実現したソ連のそれは、必ずしも民主主義とは言えないかもしれない。ラスキは、ロシア革命の精神は十分に評価するが、その後の独裁政治、それによるあらゆる自由の剥奪は、ソ連の特殊な事情を考慮に入れても、是認できるものではなかった。必然性をもって生じたボルシェビキの独裁は、民主的経験の深化の過程で、当然抛棄されるべきものであった。しかしスターリンは全く逆の道をたどっている。憂うべきはこのことである。イギリスは、民主政治の経験が長く、この道はたどらないという確信がラスキに

はあった。それは、まさに手段が「同意」によるものだからである。「若し資本主義的民主制国家への計画の導入が自由の維持と両立すべきものとすれば、かかる計画の導入を裏づけるものとして市民一般の同意がなければならぬという結論である」⁽⁵⁴⁾と云う。この「同意」により、計画的経済を実施しても、全体主義国家、組合国家にはならないとラスキは確信しているのである。イギリスにおける権力均衡の伝統、権力への参加の伝統は、そのような国家への移行を妨げるとも言っている。そして、市民の参加そのものが、この「計画的民主主義」の特徴であると次のように述べている。「計画民主制の特徴とは一言にして言えば、この体制の成員が同意した目的もしくは価値体系に市場を従属せしめることであろう。しかし、計画の対象はどこまでも民主主義社会であるが故に、その目的もしくは価値体系は、市民たる人々によって決定されるものであって、経済学者の所謂『有効需要の束に過ぎぬ人々によって決定されるものではない。計画制の民主的性格が如何なる程度までこの体制に滲透し得るか、また紛う方ない史実に徹すれば、これまで極めて少数の人々しか享受し続け得なかった自由の意識をかかるとする体制がその成員に対し如何なる程度まで興え得るかということは、計画が如何にして発現するか、また計画がその実践に際してあらゆる階級の市民の全面的協力を如何にして確保し得るかによって決定されるものである」⁽⁵⁵⁾と。

ラスキは、この「計画的民主主義」の実現を、この戦時中に「同意による革命」によって実行しようとしたのである。そして、この時期を逃しては実現不可能だとしたのである。⁽⁵⁶⁾しかし、これは保守党によっても労働党の手によっても実現しなかった。チャーチルやアトリーに対する期待は次々に失望へと変わり、ラスキの焦りは最高潮に達した。このような焦燥感は、彼にとってはストレス以外の何物でもなかった。1943年の夏には彼はしばらく神経衰弱になり、病床に臥せるということもあったのである。

4. 自由・平等観

1) 自由観

ラスキの自由観は、1910年代の消極的自由観から、1920年代の多元的国家論における積極的自由観へと変化した。さらに1930年代のマルクス主義的国家論に近づいた時は、ファシズムや全体主義国家興隆の恐怖と危険性を指摘する中で、消極的自由観の重要性を主張しながらも積極的自由観を前面に出し、彼の自由観の複雑さを見せた。さて1940年代、ラスキの自由観はどのように変化したのであろうか見てみよう。この時期「計画的民主主義」

の実現を主張するにあたって、より明確に積極的自由が強調されているように思われる。

「あらゆる社会は、何らかの前提条件の組織に基づいて築かれているものであり、その社会の成員たるものはかかる組織の尊重に同意せねばならぬものである。そして、彼らの自由は、かかる組織に対する尊敬の限界においてのみ獲得され得るものである」⁽⁵⁷⁾ と言い、「同意」され成立した組織の優位が明確に主張される。また「計画的経済を容認するためには、計画を行わんとする決意が一般に尊重されるという想定に基づいて自由というものが考えられることが是非とも必要となる」⁽⁵⁸⁾ とも言い、「同意」された計画の尊重の下での自由が主張されるのである。このような社会は、大多数の市民が遵奉しなければならない第一義的目的を設定し、この社会の市民の自由もその目的に沿って認められることになる。当然にしてこのような社会では優先順位が存在し、全てのものが自由とは行ないということでもある。

このような「計画的民主主義」社会の自由に対して、ラスキは資本主義社会での自由をどのように見ているのであろうか。それはラスキにすれば歴史に照らしても克服されるべきものであった。彼は言う。「自由市場機構に基づいて樹立された社会の本質的弱点は、かってカーライルが見た如くに、かかる社会が人間の根本的関係を金銭関係のみに立脚して築き上げてきたという点であった」⁽⁵⁹⁾ と。さらに「利潤獲得の原理を基礎として樹立された社会が収縮期に入る場合、かかる社会はその原理をヒトラー、ムッソリーニ、ラヴェールの如き人々の手に委ねるということである。彼らは、対外的には戦争を以って、対内的には独裁制を以ってのみ、かかる原理の強制を維持し得るのである」⁽⁶⁰⁾ と言う。このような資本主義的自由観に立つ代表として、先にもあげたリップマンや彼の仲間をあげラスキは批判している。まず、彼らは自由の実質というものが、歴史的事情の更新により再定義される必要があることを忘れている。そして、自由が現実に達成されるには法の支配が必要であるが、この法の支配は、社会的諸力の働きにより出来上った体制に影響を受け、この体制の有利になるように作用することを忘れていると言うのである。ラスキは言う。

「自由市場の機構を生産手段の私有に基づいて維持せんと企て、かつ、リップマン氏の如く、これに代るべきものは独裁制に他ならぬと論ずる人々は、実は、彼らの議論の性質によって一応隠されている他のものを求めているのである。つまり、彼らは、大産業の出現以前の時代に存在した資本主義的民主制の復活をわれわれに要求しているのである」⁽⁶¹⁾ と。さらにリップマンは「イタリア及び、ドイツの反革命社会、ならびにソ連——混沌と内戦から漸く立ちあがるや否や、忽ちにして現在われわれが見るとき第二の世界紛争の

影がすでに揺曳していた第一次大戦後の時代の恐るべき世界不安に直面するに至ったソ連——をこのアメリカ民主主義に対立せしめ、計画的社会は、自由及び民主主義と相容れざるものであると宣言する」⁽⁶²⁾と云って批判している。

ところで、ラスキが擁護するソ連の自由観というのはどのようなものであったか。彼は、革命後25年を経て今日に至るソ連に対して必ずしも満足している訳ではない。いやむしろ、失望感を徐々につららせていた。特にスターリンに対しては手厳しい批判をしている。「スターリンの見解に異議を挟むことは、それ自体、反革命的意見の開陳とみなされるに至った。大々的粛清、大々的追放、そして処刑が行われた。1936年の憲法の公約があるにも拘らず、スターリンの追随者の場合を除いては、言論の自由も出版の自由も、集合の自由も存在しない」⁽⁶³⁾と。しかしここに、ラスキの思考の特色があることを見逃してはならない。つまり、今日のソ連の状況は、この国の特別な歴史と政治状況の中でのことである。このことによって、自由と計画的社会が矛盾すると結論づけたり、資本主義社会の支配者が自由としているものを直ちに承認することが正しいという結論を早急に出すことは正当ではないと言うのである。ラスキは、スターリン体制の批判の一方でソ連を評価する。少し長い引用しておきたい。「ロシアが諸々の巨大な困難に直面してきたにも拘らず、また、その為政者たちが莫大な抑圧を人民一般に強制せねばならぬと感じてきたにも拘らず、ロシアにおける所有の社会化は、積極的自由の発現を愈々益々促進するという心理的結果をもたらすものであったという事実を認識することは、以上のわたくしの論旨にとって重要である。サー・ジョン・メイナードは、ロシアの労働者たちが工場を自分たちのものであると意識し、その雰囲気の中に精神の昂揚を感じている様有、社会的栄達の源は彼らの働きであって、消費力ではないという事実が個性の発現のために重要な役割を演じている点が如何にしばしば観察者の注目をひいたかを述べている。わが国において見られる如き、教育、教養、娯楽における階級性はロシアには存在しない。……個性の社会的意義を見出し得るという点においては、ソ連の市民は、大体において、今日の他の如何なる社会の人々にも優っている。独裁制の段階における一切の制約にも拘らず、ソ連が市民の地位の向上を試み、かつ事実上これも向上せしめていることは紛れもない事実である。市民の目的の貫徹はソ連の中心的目的の実現を援けるものであって、これを脅すものではない。かかる情勢の存在するところでは、社会における自由は積極的な面で活動し始めたと言える」⁽⁶⁴⁾と。

ソ連は、積極的自由を実現した国だとラスキは確信している。しかしこの1943年という

時期に、一応計画として持ち上ったことであるが、彼がソ連訪問の代表団の一員として派遣されていれば、ソ連の自由観を実際に目の当りにしたものとして変ったかもしれない。だがこの訪ソは、戦後1946年になって実現したのであった。そのことにより、ラスキは戦後ソ連に対する想い入れの気持ちがまたぐらつくことになる。⁽⁶⁵⁾しかし、1943年に書かれた『マルクスと現代』(Marx and Today)の中で次のように述べているのを見ると、ソ連を実際に視察しなくとも事の真実を把握していたかのように思われる。「ひとたび、われわれが、党を第一に考えて良心をそれに従属させる場合には、われわれは、全体主義のムードにはまりこんでしまうだろう。たとえ、ある教会が、全然過ちのない教会であろうとも、社会主義の立場から、われわれは、その教会を認めるわけにはいかないと同じように、自分たちと主義主張を異にした政府、政党が、たとえ過ちのない場合でも、それらを承認するわけにはいかない。これに反して、もしも、われわれがそれらを承認するようなことをすれば、われわれは、民主主義と自由を裏切る道を踏みこむことになるだろう。ヒトラーが常に正しく過ちを犯さないと、誰れも信じていない。このことは、チャーチル政府、コミンテルン、ソビエト共産党の政治局についても同様である」⁽⁶⁶⁾と。ラスキは、あえて訪ソをしなくとも、ソ連の特に自由の問題についての危険性を認識していた。ここにまた、人間の個性の発展維持こそ「最善の自我実現」(realize his best self)であるとし、それに不可欠なものとしての個人的自由主義を強調するという彼の自由観が顕現しているのである。⁽⁶⁷⁾

とにかく、ラスキは「資本主義が大衆に奉任し得べき条件とは、資本主義が消極的自由の面から積極的自由の面に移行することに他ならぬということになる。かくするためには資本主義は、それが保障する権利を、財産にではなく、個性それ自体に直結し得るものとならねばならぬ」⁽⁶⁸⁾と言うように、資本主義を消極的自由に立脚するものと捉えていることは明らかである。このような資本主義社会での政治は、対外対内的にみても権力政治で多大な不平等を強制するものだとしている。これに対し、積極的自由を次のように称賛し、その具現化を強調するものである。「それ(積極的自由の中心目的)は、個人の目的と社会の目的とを一致調和せしめるような機会を創り出すことを意図するものである。かくして、それは、十分に調和のとれた個性の発現が市民大衆にとって可能となるような環境を創り出すことを目指している」⁽⁶⁹⁾と。

2) 平等観

ラスキが、自由と平等について初期のころから相対立するものとして捉えるのではなく、

一貫して相互補足的に把えていることは、前にも指摘したところである。結論的に言うなら、この考え方は、この時期にも変わっておらず、生涯変ることのなかったものと思う。彼は言う。「過去においてわれわれが為したごとく、自由と平等とを相対立するものとして考えることを止めて、如何にすれば、自由と平等を内包するものが相互に浸透し合うことが出来るかをわれわれは発見せねばならぬ」⁽⁷⁰⁾と。自由と平等は、相互に浸透するものであり結びつけられるものである。ラスキは、この時期に至り、以前に比べて平等の意味を比較的明確に主張して来ているように思われる。彼は「平等とは同一を意味するものではない」⁽⁷¹⁾と言う。つまり、相違なる人々を全く同一に扱うということは、同じ衣服を与え、同じ食物を与えるというようなことと同じで、全く正当な理由がないものだという。彼は「平等とは、あらゆる人が、等しく必要とするものを十分に享受し得る同等の権利が存在するという事、並びに如何なる市民の特権といえども、他人がかかる必要の満足を獲得する権利を阻害すべきではないということの意味するものであることは確である。平等とは、また、社会全般にわたって人々が満足感を味い得る事態、つまり、万人が等しく必要とするものを最小限度に満足せしめ個性の完成を愈々増進せしめるに足るような事態を社会組織に導入することを意味する」⁽⁷²⁾と言っている。これらの平等は、まさに積極的自由観によって保障されるものであり、具体的には計画に基づく福祉の拡大を重要な国家の任務とした体制の中でこそ実現されるものである。ここに平等が確保され、個人の自由が保障される。それは、また個人の完成を進行させるものなのである。過去において、不平等が歴然として存在した社会にあっては、その不平等の維持を可能ならしめたものがあるはずである。その原因と根拠を探りあてれば、それを排除する必然性も見つけ出すことができる。この不平等を存続せしめた根拠とは何か。それは、自由を要求する特権を認められた人々が存在したということである。しかも彼らは、他人の不幸の上に自由を享受しているのである。「そもそも経済的収縮の時代において自由を享受している人々の特徴は、彼らの自由が他の人々の不幸を代償として得られたものの如く見える点にある。ある程度までは、確かに彼らの自由は他人の不幸を代償とするものではある」⁽⁷³⁾と彼は言う。この特権者の存続を認めれば、当然にも不平等が存在するという事になり、この特権者の存続は、不平等の存続ということにもなる。そこで、ラスキは、これらの特権者の自由の根拠の廃絶に向う。そして、その根源を生産手段の私的所有と私的管理に求め、これらを社会の所有にし、社会がこれを管理することを主張するのである。つまり、「同意による革命」によって「計画的民主主義」体制の確立である。これが可能となれば、人々は、

一般福祉に対する個人の要求の差異を減少できる。つまり人々は、以前よりはるかに平等社会の中で生活を営むことが出来るようになるかと考えるのである。この平等観こそは、戦後労働党が政権についた時、福祉政策の根幹にすえたもので、イギリスの戦後政治の大きな特徴となるものであった。

ここで、平等観の具現化としてのイギリスの社会福祉政策に若干触れておこう。ラスキは、福祉に関して次のように言っている。「物質的福祉が増大しつつある時には、一種の希望の雰囲気とでもよぶべきものが生まれて、それが、説得に基づく対人関係をつくらせるのである。つまり、希望は統一の要因として作用し、人々が皆共通に持っているものを認識させ、そしてそれが拡がるにつれて、もはや力を、権威の基礎とする必要がなくなってくる」⁽⁷⁴⁾と。また、「われわれの大体の人間が、その知的思惟を働かせるためには、いわば必要欠くことのできない物質的福祉の一定水準というものがあることは、すべての経験によって明らかである」⁽⁷⁵⁾とも言っている。福祉こそは、現実の政治の中で、平等の具現化だったのである。戦後のアトリー内閣は、まさにこの社会保障政策の実施に着手した。⁽⁷⁶⁾ そのキャッチフレーズは、かの有名な「ゆり籠から墓場まで」(from the cradle to the grave) というもので、イギリスの社会福祉政策の戦後の出発点を期するものであった。これは、第二次大戦中に発表されたビヴァリッジ (William Henry Beveridge) 委員会の「社会保険並びに関連サービスについての報告書」⁽⁷⁷⁾ を具体化するもので、イギリスの全国民に、最低限度の生活を保障しようとするものであった。ラスキは、この報告書に当初から賛同し、早急に実施すべきものとだとしたが、戦時内閣の消極性により戦後まで実施されなかったものである。この福祉政策の実現にこそ、ラスキは平等化の実現を見た。そして、欠乏からの脱出こそが、また自由を保障し、個人の完全なる実現、つまり「最善の自我実現」に繋がるものと考えたのである。

5. むすびにかえて

1) 戦後政治

1945年5月7日ドイツ軍が無条件降伏し、ついにヨーロッパにおける勝利の日がやって来た。ラスキが戦中にこそ実現の意義と効力があるとした「同意による革命」は実現しなかった。そこで彼は、作戦の変更にせまられる。つまり総選挙で労働党を勝利に導き、労働党単独内閣の主導により社会主義政策の実現としての「同意による革命」を持続しようとするものであった。そして、これは2ヵ月後に実現することになる。

1945年7月の総選挙において、労働党が圧勝し、⁽⁷⁸⁾ またとないチャンスがおとずれた。チャーチルは即刻辞任し、この内閣の首相に、ラスキこそは賛成しなかったが、アトリーがなった。ラスキと彼との関係は、戦中戦後を通じてじっくりいかなかったのである。戦中は、アトリーのチャーチル内閣内での追従的態度を批判し、戦後は、パレスチナからイギリス軍の撤退問題など国際問題に関して、アトリーやベヴィン外相と対立したのである。しかし、国内問題に関しては、石灰産業やイングランド銀行の国有化、社会保障政策の実現などは、国民生活に多大な利益をもたらすものとして歓迎している。とにかく、戦後のイギリスは、労働党政府主導の下でスタートを切った。人々の変革への意志の表現としての労働党支持が表明されたのである。ラスキにとっては、希望と期待のスタートとなったのである。しかし、労働党内の意志の一致の強固のものでなかったり、労働党政府と党執行部との関係があいまいだったり、この「同意による革命」は、決して順風満帆の船出をしたとは言えなかったのである。つまり、「同意による革命」を具体化し普遍化する作業が完全に遅延していたのである。

そうこうしている内に様々な問題が、ラスキにふりかかることになる。その一つは、1946年11月に始まった。ラスキの名誉毀損事件の裁判である。⁽⁷⁹⁾ 前年の選挙の応援中に行ったラスキの演説に対して、聴衆の一人が、暴力革命肯定論者として、ラスキを決めつけたことが報道された。彼が、これらのことを報道した新聞社、またそれに投書した人物を告訴したのである。この裁判は被告の代表の『ニューアーク・アドヴァタイザー』(Newark Advertiser) 紙の有利に進んだ。そして、陪審員の心証を変えることができず、ラスキは多額な資金をつぎこんだにもかかわらず敗訴したのである。ラスキにとっては、大変ショックであった。彼としては暴力革命を肯定したのではない。つまり「同意による革命」が早く実行されないと、やがて暴力革命という歓迎されない事態になるから、「同意による革命」の早期実現を促したまでなのである。⁽⁸⁰⁾ とにかく、これは、彼にとってプライベートなこととして失望感を深くいだかせるものであった。さらに1947年になると冷戦構造が着々と築かれていく。ソ連に対する期待と失望が入り混る。戦中には、あれほど入れこんでいたソ連に対する失望は、ラスキにとっては大変ショックなものであった。ヨーロッパは分断され、このことは平和と自由を破壊するものと彼は考えた。「同意による革命」が国際的な平和環境の実現まで含んだものとするれば、この時には、すでに「同意による革命」は頓挫したと言ってもよいだろう。これは、マーシャルプランなどアメリカの対外政策のせいでその責任も重大だと彼は述べている。「アメリカ政府は、現在、限度のある、

計算された危険を冒しているのではない。それは、はかることのできない危険にむかって容赦なく動いているのである。それは、たんに自国民に第三次世界大戦の心構えをさせるという心理的過誤をおかしたばかりでなく、アメリカは共産主義に敵対するいかなる政府に対しても、ただちに援助を与えようとしているといった印象をかもしだすという、重大な心理的過誤をおかしたのである」⁽⁸¹⁾と。

このような私的・公的失望の中で、元々体力に自身のなかったラスキの健康状態は、おもしろくない方向に向っていた。それでも雑誌論文や時事評論の執筆や講演活動に精を出し、学問への情熱と現実政治への期待を語り続けた。しかし、体力の衰いは急速にやって来た。1949年には労働党の執行委員を辞任し、研究活動中心の生活に向う予定であった。しかし彼の多方面に渡る関心は、それをゆるさなかった。1950年2月の総選挙の労働党応援に積極的に協力した。その結果、過半数をようやく確保した労働党は、引き続き政権を担当することとなった。しかしこの第二次アトリー内閣は辛うじて予算は通過せしめたが、様々な難問をかかえることとなった。アトリーは翌年の1951年10月に解散総選挙を決意することになる。しかし、ラスキはこの総選挙に参画すべきもなかった。悪化していた気管支炎は、1950年2月の総選挙の一月後に、肺膿瘍の破裂を引きおこし、彼の56年の歳月は終るのである。

2) 自由の探求者ラスキ

1945年の選挙は、労働党が立憲的手段により結党以来初めて権力の座につき、この政党が、労働者のために大改革に乗り出す契機を作ったのである。イギリスでは、このような方法が可能であり、実現したのである。ラスキ自身は、これをイギリスの歴史と伝統の影響であるとし、民主主義的政治風土が比較的成熟した社会の結果だとしている。これは当然にも、自由を犠牲にし、やがて完全な自由の実現を目指すという——しかしそれが可能かどうか全く予想がつかない——独裁政治を選択するより、はるかに安全で、確実な方法だと、ラスキをして益々確信させるに至るのである。この認識の根底にあるのは、やはり、ソ連の現状であった。ラスキは、ソ連の実験に対して明らかにその国の歴史性や思想的背景の特殊性をみてとった。それは、まぎれもなく、西欧的社会主義の実現の方法とは違う、ソ連の独自の方法であるとしたのである。今あまりにもその方法が、自由の欠乏と希望の活力を失わしめているのを目のあたりに見たのである。1930年に初版として出版された『近代国家における自由』(Liberty in the Morden State)に1948年結論⁽⁸²⁾がつけ加えら

れるが、その中で、ソ連に対する独裁体制の理解と、批判が明確に語られている。一方で、この独裁は、ムッソリーニやヒトラーのそれとは全く異なり、目的が福祉に向けられ社会の消費を基準とした生産を計画しているのだと評論する。⁽⁸³⁾しかし、自由の問題に対する批判は厳しさを増している。「私自身としては、ソビエト・ロシアのように一党制の上に築かれた社会が明らかに進歩的でありかつての市民の福祉の確保に熱心でありえることを十分に認めはする。だが、説得によらず圧制によって進歩を達成しようとする社会の決意が、自由の成就を阻む甚だしい障害となると私は論じたのである」⁽⁸⁴⁾と。また「三十年を経た今でもなお明らかに独裁である。この事実が全世界にわたって自由に心を寄せる人々の失望と落胆を招いたのはまことにもったもなことである。……四つの自由⁽⁸⁵⁾は、ソビエト連邦には根本的に存在しない。そこでは、国家体制の基礎を批判する自由はない。共産主義指導者を追放する政党を結成する自由もない。独裁者の眼から見て、当該体制の安定性を脅かすような見解を鼓吹する評論雑誌や書籍を発行しえず、またそうした集会をも持ちえない」⁽⁸⁶⁾と。また、1949年のアメリカ訪問後に書かれ、彼の遺稿集となった『岐路に立つ現代』(The Dilemma of our Times)の中でも、ソ連が、新しい冒険に挑戦し、人間の再生の熱情の確信があり、融通性があり、調整力があり、誤謬をあらためる度量があり、「自由にとってかくべからざる何者かを蔵している」⁽⁸⁷⁾と述べながらも、厳しい批判が随所に見られる。「マルクスは、あらゆる権力を一手に集め、かつ自己に対する批判はすべて反逆の証拠であるとする全体主義的独裁政治が望ましいなどとは、どこにも言ってない。1917年以後のレーニンがとった手段は、いずれもソ連の事態にとって必要だと彼が考えたことに即応したものであったこと、またソ連の型が普遍的妥当性をもつという理由で彼やその後継者によって押しつけられた場合には、それは常に害にこそなれ、益にはならなかったということは、充分明白である」⁽⁸⁸⁾と言うのである。われわれは、ここにラスキのイギリス自由主義と、政治的民主主義への回帰を明確に見ることが出来るのである。

このような状態の中で、ラスキは自らの政治思想の活路を「同意による革命」による「計画的民主主義」の実現の中に見つけ出すのである。しかし、この思想の中にも難問が依然として存在した。ラスキが生涯においてこだわり続けた自由の問題は解決したのであろうか。彼は、積極的自由と消極的自由とを区別し、これらを巧みに使い分けて来た。当然この「同意による革命」による「計画的民主主義」の実現の過程では、積極的自由が前面に出て来ていることは間違いない。かと言って消極的自由を全く消滅させてしまったかと言

うとそうではない。ここにラスキの思想の特徴があり、理解の上での困難性があるのである。これは、ラスキが決定論者ではなかったこと、つまりプラグマティックな思考方法の中で、歴史の必然というような決定論を嫌悪したこととも関係あるかもしれない。彼は1930年代、マルクス主義の国家論に最接近した時でも消極的自由観を維持していたことは先稿において述べたところである。それは、この40年代においても引き継がれていたと考えて良い。人間の歴史は、変革が起れば必ず反動勢力を生み、それによって再び権力機構が支配されるケースがしばしばある。ラスキは、このことを見抜き、彼の自由論の一端に消極的自由観を忍ばせていたのである。ラスキは、二つの自由観を巧みに使い分け政治状況の批判的視点としたのである。イギリスの戦後は、まさに労働党政府による新しい社会の実現が可能のように見えた。そこでは、積極的自由が、その体制の中で妥当性を持ち、彼の考えるより良き社会、つまり、「最善の自我実現」の可能な社会に近づくと予感したのである。このようなラスキの二つの自由観の使い分けの中に、われわれは、彼の自由論の本質を見るように思うのである。つまり彼は、絶対権力に対する絶対反対者だったのである。それは、体制が変わり社会主義体制が実現しても例外ではなかった。イギリス流個人的自由主義の考えを依然として残していた。積極的自由の主張であれ、消極的自由の主張であれ、そこには「最善の自我実現」のための自由を探求したのである。社会体制が如何なるものであれ、この自由を求めたのである。そして、体制の相違により、一方を強調し、他方を収めるという方法をとったのである。また当然その逆もありえた。この方法が必ずしも妥当性を得ているとはかぎらない。むしろラスキの思想の質にまで言及する意見もある。⁽⁸⁹⁾ 1989年ソ連が崩壊し、個人の目的と社会の目的とが合致する範囲での自由、つまり積極的自由の側に立つ論拠は全く消え失せたのであろうか。しかし、一方でルーズベルト大統領が唱えた四つの自由、つまり欠乏からの自由、恐怖からの自由、表現の自由、信教の自由は、完全に保障され実現されたのであろうか。国内外の情勢を見ればこれも正しくないことは一目瞭然である。消極的自由の実現の道のりもまだまだ遠いものとしてある。ラスキが生きていたら、このような現状を見て、どちらの自由を強調するであろうか。それとも二つを抛棄し新しい自由観を主張するであろうか。⁽⁹⁰⁾

とまれ、ラスキの自由に対する考えが象徴的に表われている言葉をもって本稿を終りたいと思う。「人間の奉仕する理想の中で独り自由のみが、切なる要求に応じて立つ民衆の守りとして英雄たる資質を賦与するものだということである」⁽⁹¹⁾

注

- (1) 拙稿で第一段階(1910年代後半から1920年代前半)を「H.J.ラスキの政治思想－初期作品の主権三部作を中心に－」(本紀要、第3号、1992年)で、第二段階(1920年代)を「H.J.ラスキの政治思想－多元的国家論の展開を中心に－」(本紀要、第4号、1993年)で、第三段階(1930年代)を「H.J.ラスキの政治思想－階級国家論への移行を中心に(1)・(2)－」(本紀要、第5号、1994年、第6号、1995年)で、扱っている。
- (2) この点に関して、フリーデンも同様の指摘をする。M.Freeden, *Liberalism Divided, A Study in British Political Thought 1914 - 1936*, Oxford Univ. Press, 1986.
- (3) 村岡健次、木畑洋一編『世界歴史大系イギリス史近現代第3巻』山川出版、1991年、306～44頁参照。
- (4) 詳しくは、富岡次郎著『イギリス社会主義運動と知識人』三一書房、1980年、18～30頁参照。
- (5) 詳しくは同上書247～80頁。また最近出版された水谷三公『ラスキとその仲間－「赤い30年代」の知識人－』中央公論社、1994年、37～109頁に詳しい。
- (6) 関嘉彦著『イギリス労働党史』社会思想社、1969年、217頁。
- (7) ラスキとチャーチルとの関係は、ラスキの少年のころから始まる。チャーチルは自由党の立候補者としてラスキ家を訪れ、彼の父としばしば語りあっていることをラスキは記憶している。彼との文通は1914年から1949年まで続いた。K.Martin, *Harold Laski*, London: Victor Gollanz Ltd., 1953, p.12. [山田文雄訳『ハロルド・ラスキ』社会思想研究会出版部会、1956年、7頁。]
- (8) H.J.Laski, *Reflections on the Revolutions of our Time*, London: George Allen & Unwin Ltd., 1942. 以下Reflectionsと略す。[笠原美子訳『現代革命の考察』みすず書房、1969年。]
- (9) H.J.Laski, *Faith, Reason and Civilization*, London: George Allen & Unwin Ltd., 1944. 以下Faithと略す。[中野好夫訳『信仰・理性・文明』岩波書店、1951年。]
- (10) Reflections, p.46. 邦訳書、59頁。
- (11) *ibid.*, p.70. 邦訳書、104頁。
- (12) Faith, p.142. 邦訳書、196頁。
- (13) Reflections, p.43. 邦訳書、55頁。
- (14) *ibid.*, p.47. 邦訳書、61頁。
- (15) *ibid.*, p.82. 邦訳書、112頁。
- (16) Faith, p.157. 邦訳書、217頁。
- (17) *ibid.*, p.157. 邦訳書、218頁。
- (18) *ibid.*, p.80. 邦訳書、80頁。
- (19) Reflections, p.66. 邦訳書、88頁。
- (20) *ibid.*, p.65. 邦訳書、87頁。

- (21) *ibid.*,p.66. 邦訳書、89頁。
- (22) ベロフやツィルストラも同様の指摘をする。M.Beloff, “The Age of Laski”, *Fortnightly Review*,CLXVII(June 1950),p.378. B.Zylststra,From pluralism to Collectivismus:The Development of H.Laski's Political Thought,Netherland:Royal Von Gracum,1970,p.169.
- (23) *Reflections*,pp.70～1. 邦訳書、95頁。
- (24) *ibid.*,p.29. 邦訳書、33頁。
- (25) *ibid.*,p.69. 邦訳書、94頁。
- (26) *ibid.*,p.95. 邦訳書、130頁。
- (27) *ibid.*,p.88. 邦訳書、120頁。
- (28) *ibid.*,p.91. 邦訳書、125頁。
- (29) ディーンは、ラスキが一方で、ファシズムを、自由主義的形態をもつ資本主義の破壊と言いながら、他方で、それが自由主義的起源を拒否する資本主義であるというのは、資本主義の概念を理解出来てないと批判する。H.A.Deane,*The Political Ideas of Harold J.Laski*, Columbia Univ.Press,1955,p.235.〔野村博訳『ハロルドラスキの政治思想』法律文化社、1977年、235頁。〕
- (30) *Reflections*,p.253. 邦訳書、358頁。
- (31) ディーンは次のように言っている。「イギリスに対する最悪の危険が通り過ぎたように思われ、ナチズムの敗北とともに現れる未来を考えることが再び可能になった1943年までに、イギリス民主主義に対する彼の賛辞は終って、資本主義的民主主義・消極的自由・ブルジョア自由主義についての初期(多元的国家論時代)の批判にもどったのである」と。(Dean,opcit., p.228. 邦訳書、229頁。)
- (32) *Reflections*,p.164. 邦訳書、231頁。
- (33) *ibid.*,p.166. 邦訳書、233頁。
- (34) 笠原欣幸氏は、「同意による革命」は「反ファシズムと民主主義のための戦争において『コモン・ピープル』が示した能力の開化・連帯の精神が、平時においても日常的に保障される社会の基礎を戦争中に築くことを目的とした」と言い、その社会とは「無秩序な自由放任主義的生産に対する計画生産、不要商品に対する社会的必要物の生産、富の偏在に対する平等な分配、生活の不安に対する社会保障、出身階級の重視に対する能力の重視・教育の機会均等、帝国の既得権益の保持に汲々とする資本主義者の外交政策に対する社会主義者の外交政策、反動政権挺入れに対する人権外交、競争する社会に対する協調する社会」と言っている。(同著『ハロルドラスキー政治に挑んだ政治学者ー』勁草書房、1987年、173～4頁。)
- (35) *Reflections*,p.176. 邦訳書、248頁。
- (36) *ibid.*,pp.198.～9. 邦訳書、281～2頁。
- (37) *ibid.*,p.169. 邦訳書、237頁。

- (38) *ibid.*, p.203. 邦訳書、288頁。
- (39) *ibid.*, p.204. 邦訳書、290頁。
- (40) H.J.laski, *The Strategy of Freedom*, New York:Harper and Bros,1941, pp.39~45.
- (41) *Reflections*, p195. 邦訳書、276~7頁。
- (42) これは手紙として、ラスキに伝えられた。原文が、マーチンの前掲書222~7頁(K.Martin, *opcit.*, pp.159~62.) に載っている。
- (43) *Reflections*, pp.200~1. 邦訳書、284頁。
- (44) *ibid.*, p.307. 邦訳書、436頁。
- (45) *ibid.*, p.308. 邦訳書、437頁。
- (46) *ibid.*, p.308. 邦訳書、437頁。
- (47) *ibid.*, p.308. 邦訳書、437頁。
- (48) *ibid.*, p.310. 邦訳書、440頁。
- (49) *ibid.*, p.310. 邦訳書、439頁。
- (50) *ibid.*, p.311. 邦訳書、441頁。
- (51) リップマンはアメリカで政治評論家として主に『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』(Newyork Herald Tribune) 紙でコラムを書き活躍する一方で、政治学者としての名声も高い。特に世論研究ではステレオタイプ概念を導入し特異な理論を展開した。代表的著書に次のものがある。W.Lippman, *Public Opinion*, Newyork:Macmillan,1950。〔掛川トミ子訳『世論』上・下、岩波文庫、1987年。〕
- (52) *Reflections*, p.326. 邦訳書、462頁。
- (53) *ibid.*, p.328. 邦訳書、466頁。
- (54) *ibid.*, p.336. 邦訳書、477頁。
- (55) *ibid.*, pp.341~2. 邦訳書、484~5頁。
- (56) ディーンは、ラスキの見解に対して「必然的に労働者をして社会主義か資本主義に取って代ることを要求するようにさせるだろうと仮定することで、彼は誤りを犯すのである。不景気を防いだり、あるいは不景気の結果をそっと押えたりするために立案された計画によって、また福祉国家の法案によって、政府は資本主義制度を廃棄しなくとも、大衆の経済的安定に対する要求を満足させることができるかもしれない」と言い、ラスキの一連の戦略に対して批判的である。(Dean, *opcit.*, p.252. 邦訳書、253頁。)
- (57) *Reflections*, p.336. 邦訳書、476頁。
- (58) *ibid.*, p.336. 邦訳書、476~7頁。
- (59) *ibid.*, p.313. 邦訳書、444頁。
- (60) *ibid.*, pp.314~5. 邦訳書、446頁。
- (61) *ibid.*, pp.322~3. 邦訳書、457~8頁。

- (62) *ibid.*, p.324. 邦訳書、459頁。
- (63) *ibid.*, p.68. 邦訳書、91～2頁。
- (64) *ibid.*, pp.359～60. 邦訳書、509頁。
- (65) 富田容甫氏は、このようにラスキが自由の問題に対しジレンマに落ち入るのは、彼が「自由と権力の均衡という観点から自由の問題を捉えようとする彼の基本的構想に由因して提起されるものであり、したがって、このような基本的構想に出発する彼の理論の解決能力を越えるものであったからである」と述べる。(横越英一、富田容甫、彌益祥純、鈴木安蔵著『ハロルド・ラスキ研究』所収「ラスキの自由論」勁草書房、1954年、139頁。)
- (66) H.J.laski, *Marx and Today*, London: The Fabian Society, 1943, p.28. [岡田良夫訳「マルクスと現代」『マルクスと現代』ミネルヴァ書房、1969年、249頁。]
- (67) 柴田卓弘氏は、ラスキの自由論について特に論究し、次のように述べている。「後期のある時期にはいく分かげりを見せるとはいえ、終始自由主義者であり、個人主義者であった。彼は一貫して個性と良心の自由の主張者であった。しかし生涯を通じて、ラスキは個人の自由を実質的たらしめようと努めた」と述べ、自由主義者ラスキを強調している。(同著『イギリス自由主義の展開—古い自由主義の連続を中心に—』早稲田大学出版部、1981年、345頁。)
- (68) *Reflections*, p.358. 邦訳書、508頁。
- (69) *ibid.*, p.358. 邦訳書、507頁。
- (70) *ibid.*, p.186. 邦訳書、262頁。
- (71) *ibid.*, pp.186～7. 邦訳書、264頁。
- (72) *ibid.*, p.187. 邦訳書、264頁。
- (73) *ibid.*, p.186. 邦訳書、262～3頁。
- (74) *ibid.*, p.170. 邦訳書、236頁。
- (75) *ibid.*, p.184. 邦訳書、256頁。
- (76) アトリー内閣の社会保障政策は、単なる欠乏を防ぐというだけでなく、人間の精神的肉体的発展に必要な最低限度の保障という観点から進められた。特に最低生活の保障として、社会保険法の実施、医療の国営化としての国民健康法の実施、住宅不足解消などがあげられる。(関嘉彦著、前掲書、282～8頁を参照。)
- (77) イギリスの経済学者ビヴァリッジを中心にまとめられた報告書で、この中で彼は、国民を脅かす五つの巨大悪として、怠惰 (idleness)、窮乏 (want)、病気 (disease)、無知 (ignorance)、不衛生 (squalor) をあげている。これらを解消するために、全国民を対象として、完全雇用制度、健康医療サービス制度、児童手当制度などの確立をめざし、最低生活水準を保障しようとするものであった。これは戦後資本主義国の社会保障制度の指針となった。
- cf. D.Gladstone ed., *British Social Welfare, Past, Present and Future*, London: UCL Press, 1995, p.268.

- (78) 労働党393議席、保守党213議席、自由党12議席、共産党2議席、コモンウェルス党1議席、その他19議席という結果で、労働党結党以来45年目で初めて絶対多数の議席を獲得した。労働党議員の構成は6割が選挙区労働党が後援する議員であった。(関嘉彦著、前掲書、232頁参照。)
- (79) この裁判に関しては、G.Eastwood, Harold Laski, London: A.R. Mowbray & Co. Ltd., 1977, pp.140~55. に詳しい。
- (80) この時、彼の著作も証拠として提出させられた。その一つの『現代革命の考察』の中で次のように言っている。「すなわち、今次の戦争において重大なものはこの戦争によって公然と表明されるに至った諸力の原因のみならず、またその結果であるが故に、休戦に至るまでにすべての人の同意による革命の基礎を置くことができぬ限り、われわれは、次の如き情況、つまり人々が最早人生の主要目的を等しくせぬがために、社会変革の方法に関しても意見の一致に達し得ぬといった情況に急速に直面するであろうと。かかる場合に立ち至れば、われわれの根本原理の最組織を平和手段によって実現することは不可能となるであろう。そして諸々の力の究極的配分の決定的討議によらず、暴力によって行われることとなろう。その際いずれの側が勝利を収めるにせよ、かかる結果が少くとも当分の間自由と民主主義との終結を意味するものであることは、あらゆる史実に照して、議論の余地なきまでに明白な事実である」と。(Reflections, pp.338~9. 邦訳書、480頁。)
- (81) H.J.Laski, The Dilemma of Our Time, An historical Eassy, London: George Allen & Unwin Ltd., 1952, p.200. 以下Dilemmaと略す。〔大内兵衛、大内節子訳『岐路に立つ現代』法政大学出版、1955年、259頁。〕
- (82) H.J.Laski, "Introduction" to Liberty in the Modern State, London: George Allen & Unwin Ltd., 1948. 以下Introductionと略す。〔飯坂良明訳『近代国家における自由』所収の諸論、岩波書店、1951年。〕
- (83) Introduction, pp.41~2. 邦訳書、14頁。
- (84) *ibid.*, p.26. 邦訳書、14頁。
- (85) アメリカ第32代大統領ルーズベルトが1941年第77議会にあてた教書の中で使った言葉である。この中で、彼は第二次大戦の意義を述べ、全世界は未来に次の四つの自由を守るよう努めるべきだとしたのである。言論・表現の自由、信教の自由、欠乏からの自由、恐怖からの自由である。
- (86) Introduction, p.41. 邦訳書、30~1頁。
- (87) Dilemma, p.60. 邦訳書、66頁。
- (88) *ibid.*, pp.160~1. 邦訳書、208頁。
- (89) ディーンは「西洋自由主義の諸価値——個人的自由、自発的さまざまな意見や行為についての寛容——に対する彼(ラスキ)の傾倒と、これらの諸価値を破壊するソビエトの指導者た

ちの政策、行動の多くを擁護または弁明しなければならないという彼の感情とその決定的な矛盾に打ち勝つことに彼はどの点においても成功していない」(Dean, opcit., p.310. 邦訳書、308頁)と述べている。

- (90) ラスキは1993年に生誕100年を迎え、イギリスでいくつかの出版物が出された。ラスキの思想を編年史的にまとめたものに、I.Kramnick and B.Sheerman, Harold Laski, A Life on the Left, London: Hamish Hamilton, 1993.がある。また、ラスキの政治思想の弱点に論究しながら、今日的意義を探ろうとしたものに、M.Newman, Harold Laski, A Political Biography, London: Macmillan, 1993.がある。
- (91) Introduction, p.47. 邦訳書、37頁。